

<縄文海人（あま）と弥生海人>

かつては神道と習合していた仏教。その仏教界の巨人に空海がいる。<星の信仰>では、空海は縄文海人の一族と考えられ、中でも王位に匹敵する立場であろうと考察したものの、それ以上深くは考察しなかった。そこで、更に空海を深く考察する前に、空海に関わる縄文海人の素性について、知っておく必要がある。また、弥生海人も縄文海人と深く関わりがあるので、併せて考察する。

(1) 落合史観

“京都皇統（代）”やその“舎人（とねり）”を通じて情報を得ているとされる落合莞爾氏の秘史については既存の記事<落合秘史>に述べられているが、そこでは縄文海人について触れた。しかし、邪馬台国大王家である海部氏を、縄文海人に背乗り（はいのり）した一族と見なしていることからすると、海部氏はよほど触れられて欲しくない一族のようだが、まずは<落合秘史>の中で、縄文海人に関わる部分の概要を振り返る。

① 起源

ウバイド・シュメル文明の遺民を結ぶネットワーク＝ワンワールドネットワークを構築するため、ウバイド人が西の端はケルトまで、東の端は日本まで移動した。（落合氏は“シュメル”と言っている。）縄文後期に渡来したウバイド人が族種橘氏、彼らと共に船団を成して渡来したのが族種平家で、旧石器時代から居た安曇氏と共に後期縄文時代を築いた。彼らをまとめて縄文海人と言う。この海人の系統が、後の皇室に后・妃を出し続けてきた。

② 特徴

ウバイド系縄文海人の本質は、黄金の保有と管理である。彼らはウバイド天孫系の血を引く応神を半島の任那から招いて天皇とし、応神が持参金として持ち込んだ満洲砂金をファンドとした。

縄文海人の安曇系真田氏、熊野系和田橘氏、土師系菅原氏・大江氏、美濃源氏系土岐氏は強い同族意識を有し、縄文巨石文明に基づいて互いにイシヤ（石屋）と呼び合う國體財務衆である。（政体は表、國體は裏を司る。）すなわち、石工組合＝フリーメイソンの大元である。

③ 行動

南朝系を補佐した彼らは、南朝系の血統と共に熊野水軍を利用してマラッカからインド洋を西に進み、セイロン島経由でアラビア海を通過してホルムズ海峡

から上陸し、イラン領内を北上、そして黒海を渡り、コンスタンチノーブルからヴェネツィアに入り、西大寺の黄金を元手として繊維業などから財を成し、いわゆるヴェネツィアン・コスモポリタンとなった。そして、王侯貴族と関わりを持ち、最終的にはオランダ、ベルギーなどの王家に入り込んだ。特に、オランダでは英国王となったオラニエ公（オレンジ公）がその典型で、彼らが設立したライデン大学は、欧州に於ける彼らの活動拠点となった。

後に共産革命思想が発生して世界中に広がるが、それによる國體破壊を防止するため、海外ネットワーク（大塔宮ネットワーク）を通じ、外部から開国を迫らせ、明治維新となった。

(2)海部氏の真相を考慮した縄文海人

①ウバイドとシュメール

ウバイドは前シュメールであり、シュメール文明が起こったからといって、ウバイド人がどこかに追いやられたとか、逃げたと考える必要は無く、同化したと見なしてもまったく問題無い。

大洪水後、アムンナキは人類に少しずつ文明を授け、ようやくシュメール文明と言える時期に多くを伝授した。そこからエジプト、インダスと次々に文明を開花させていったわけで、ウバイド人が文明を伝えたわけではない。

シュメールでは一定期間毎に都が移動し、その度に最高神も変化した。王家はそれぞれの最高神を崇敬し、その王家は、最高神の血を受け継いでいる場合もあった。従って、シュメールの王家と言っても様々な神の血統があるわけで、ニビルの掟に従えば、できる限りアヌやエンキ、エンリルとの血が濃い者が優遇されたのであろう。しかし、時代を経るに従い血は薄くなるから、一概にどこの王家が最高なのかとは言いにくく、各王家が主張し合っていたというのが実情である。

海部氏は単なる十支族エフライム族の大王家ではなく、サマリア＝小さなシュメールの大王家(*)だから、シュメール正統王家から連なる血統である。(イスラエル十支族とユダ二支族が血統的な近縁関係に無いことは、三笠宮殿下など古代オリエントの研究者らが明らかにされている。)和田橋氏が縄文王国の筆頭王家で、海部氏が邪馬台国の大王家ならば、和田橋氏こそ卑弥呼の邪馬台国に最後まで抵抗していた狗奴(くな)国の王家で、両王家の間に上記のような論争があったと考えられる。

*＜日本の真相＞シリーズや＜信州の奇祭＞参照。

②応神までの流れ（＜日本の真相＞シリーズ）

金属文化を有しなかった縄文王国に、鉄器を持った海部氏一団が渡来した。そのため、戦わずして和平が結ばれ、海部氏が新たな大王家となった。その後やや遅れて、秦帝国（ペルシャ系十支族ユダヤでイナンナが創造神）の徐福率いる一団が渡来し、同じくイナンナを最高神とする海部氏と容易に婚姻関係を結んで物部氏となり、弥生時代が始まった。

和田橋氏が海部氏の邪馬台国に権力を委譲した後、しばらくして半島経由で原始キリスト教徒の秦氏が渡来し始めた。彼らの中核はユダ二支族だが、十支族も多く存在し、彼らは改宗していた。その大王がフル（＝応神）である。フルが満洲砂金（とマナの壺）を持参金として持ち込んだのであれば、黄金を重視する縄文海人が見逃すはずはない。そこで、秦氏と手を組んでそそのかしたのかどうかは不明だが、海部氏と婚姻関係にある徐福系の出雲族のある者が御神宝を秦氏に渡してしまい、その兄弟間で殺人が起きてしまった。それがきっかけで（かつイエスが降臨したことにより）最終的に海部氏は秦氏へ王権委譲することとなり、代わりにフルが海部氏に婿入りして応神となり、これにて邪馬台国時代は終了し、大和朝廷の始まりとなった。

すなわち、“敵の敵は友”の論理で、海部氏を快く思っていない縄文海人の一族が秦氏と同盟し、海部氏は王権の座から降ろされたのである。以後、皇統は基本的に秦氏、后（妃）は縄文海人となった。そして、悲劇の出雲族は何かにつけて崇る神として、丁重に祀られるようになった。

まとめれば、秦氏系に国譲りするまでの流れは、以下のようなになる。

- ・環太平洋文明圏縄文王国（安曇氏）→後期縄文王国（和田橋氏）→弥生時代（海部氏・徐福系物部氏、邪馬台国）→大和朝廷（応神以降、秦氏）。

神武は縄文から弥生への転換点、応神は邪馬台国から大和朝廷への転換点で、それぞれ大王家が替わっている。それが“神”という字で暗示されており、崇神もまた然り。崇神ことオトヨノミコトは、海部氏と婚姻を結んだ徐福系物部氏＝葛城氏である。この崇神の時点から、海部氏の直系は丹後に戻り、半島（主に新羅）及び大陸との外交と交易を担い、まつりごと（政、祭）は纏向で葛城氏と海部氏の兄弟分家である尾張氏が共に手を携えて行った。つまり、政体と國體の分離が始まったのである。（＜神の名を冠する天皇＞）

③縄文海人と海部氏（弥生海人）の棲み分け

大和朝廷設立後の役割分担は、表の皇統は秦氏、裏の黄金の管理と運用は縄文海人である。では、海部氏系（弥生海人）はというと、海部氏系の祭祀の本

質は“不老不死”であり、その妙薬は硫化水銀の丹生（にゅう）で、海部氏系がそれに関わる。全国の重要な寺社の配置には、丹生鉾脈に深く関わっている所があり、空海の足跡などもこれに関わる部分が多く、寺社の楼門などに丹塗が多いのも不老不死を願ってのことであり、丹生一族は海部氏と同族である。

また、丹生は蓬莱伝説などの基になっており、秦の始皇帝が求めたともされる。秦帝国は都の造りなどがペルシャそっくりなペルシャ系十支族王国であり、始皇帝の使者、徐福の一団は丹生のために同じ十支族の海部氏と和平を結び、物部氏となったわけだが、他に不老不死で有名なのが、海部氏が建国に関わった新羅の王子、天之日矛（天日槍、アメノヒホコ）の玄孫の田道間守（タジマモリ）が垂仁天皇の命を受けてもたらしたとされる非時香菓（ときじくのかぐのこのみ）である。この実質は橘であり、日本に古くから自生していることからすると、海部氏が渡来する前から橘氏が居たということの暗示である。

また、大船団で渡来した海部氏は、当時の日本の表玄関である丹波～出雲の日本海側を拠点とし、大陸や半島との交易を取り仕切っていた。そして、海部氏の祖、瓠公（ココウ）や脱解王（ダツカイオウ）が鉄鉾石が豊富に存在した半島に渡り、新羅を建国した。（当時は鉄を制した者が時代を制した。）縄文海人の黄金取引の拠点である羅津（らじん）は高句麗の地に相当するが、日本海に面する天然の良港なので、この地も例外ではない。



海部光彦編著、元伊勢籠神社社務所、
『元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図 増補版』

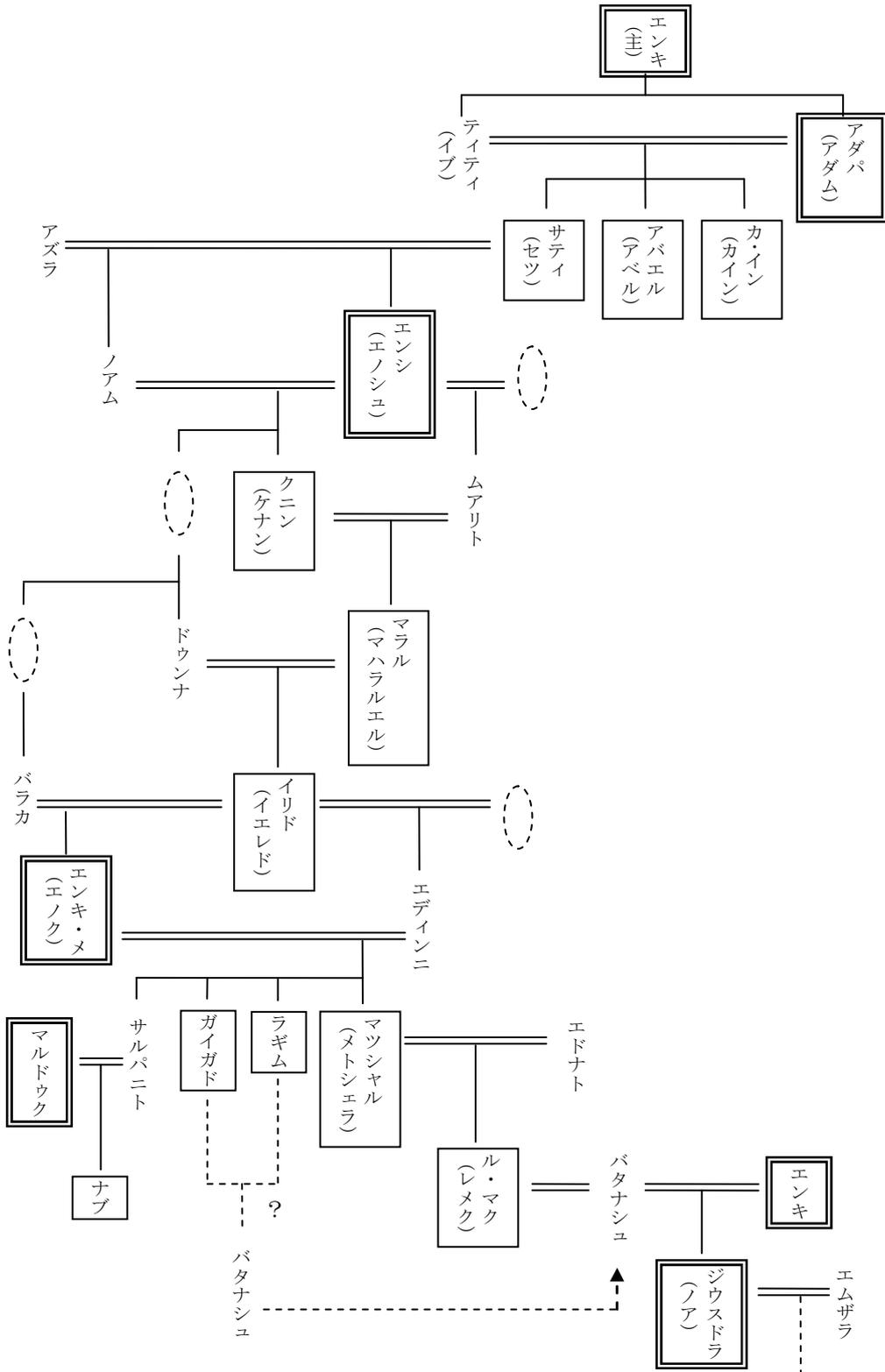
そして、祭祀は現在の神道に繋がる邪馬台国のものがベースとなった。八咫鏡のオリジナルは、海部氏が代々手渡しで継承している息津鏡・辺津鏡で、卑弥呼が神事で使用し始めたものである。その写しが八咫鏡とされ、伊勢の神宮が創建されて祀られた。（海部氏に関わっている暗示として、海部氏の祖の倭姫が神宮創建に携わったことにされている。）そして、三種の神器の1つである草薙神剣はアロンの杖と鉄剣だか、これらはエフライム族の大王が王権の印として持っていたものであり、海部氏の兄弟分家である尾張氏の熱田神宮で祀られ、皇居にあるその写しは、勾玉と共に皇位の証となっている。神器は、元々持っていた一族が持たなければならず、そうでなければ、崇られるのである。（剣は伊勢の倭姫からヤマトタケルに託されたことにされ、勾玉は王権のある土地の象徴なので、天皇の宮城（きゅうじょう）にある。）

(3) 縄文海人の系統

落合史観をベースとし、海部氏の真相を考慮した縄文海人の概要は以上だが、では、縄文海人は本当にウバイド由来なのだろうか？

縄文王国は環太平洋文明圏（言わばムー・レムリア文明圏）の中心であることは言うまでもないが、最新の遺伝学では、人類の祖はアフリカで、中南米のインディオと縄文人は祖を同じくするという。エンキがアフリカで遺伝子実験して人類は誕生したので、アフリカ起源は当然で、そこからエンキの遺伝子を引き継いだアダパが誕生し、カ・インとアバエルが誕生した。カ・インは嫉妬でアバエルを殺したので中南米に追放されたが、アフリカ～中東ではアバエル亡き後のアダパの息子サティの子孫が広がり、それがユーラシア大陸へ広がった。しかし、大洪水で多くは滅びたものの、縄文遺跡の状態から推察すると、大洪水ですべてが水の泡になったわけではないだろう。そして、大洪水後に助かった中南米のカ・インの系統は環太平洋地域に広がったので、大洪水後の縄文人はサティの子孫とカ・インの子孫の混血と考えられる。（＜神々の真相 1＞）これをここでは前期縄文人と呼ぶが、彼らが海部氏渡来時の縄文王家なのだろうか？

言語学的な考察から、その後、周辺の東南アジアなどからも渡来があるが、シュメール王家を引き継ぐ海部氏が娶るような王家が既に縄文日本にあったわけである。それは、やはり“罪人”カ・インの系統ではなく、別のシュメール王家の系統と見なすのが妥当である。（次ページ系図の括弧内は、聖書に於ける名称である。）



ここで注目すべきは支那の古代文明である。ゼカリア・シッチン氏の一連の著書ではインダスや中南米についての記述は出てくるものの、何故か、支那（と日本）は外されている。また、皇室筋から情報を得ているとされる落合氏に依ると、ウバイド系縄文海人は砂金を集め、それが現在の世界金融を裏から支えている日本の資金の基になっており、朝鮮半島北部の羅津が大きな拠点の1つだという。

しかし、ウバイド人は後のシュメールに含まれるウバイドに居たので、どこかに行ってしまったのではなく、シュメール人と化したとも考えることができる。そこで、大陸で黄金に関わる重要な古代王朝に着目する。それは、古代四川にあった古蜀（こしょく）文明である。

四川にはその名の通り、長江に注ぐ4つの川、岷江（みんこう）、沱江（とうこう）、涪江（ふうこう）、大渡河（だいとが）が流れるが、エデンの園もチグリ、ユーフラテス、ギホン、ピションの4つの川に囲まれていたことから、エデンの園の支那版と言える。この古蜀では黄金文明が栄え、黄金はアヌンナキに関わる。この文明は幻とされる夏（か）王朝以前の文明で、支那各地の文明は少なからずもこの古蜀の影響を受けている。言わば、黄河・長江文明の源流である。

漢字の基もシュメールの象形文字であるところは言語学的に判明しており、四川省では漢字成立以前の古い、象形文字のような巴蜀（はしょく）文字も発見されているし、羽のある人間“羽人（はじん）”も見つかっている。これなどは、驚人間とされたアヌンナキの様相を模したものであろうが、天狗の元と見なすこともできる。

象形文字と楔形文字、漢字

変遷 →

					UTU UD	日の象形文字→楔形文字
					ニ チ 日	日の象形文字→漢字
					KUR	山の象形文字→楔形文字
					山 やま	山の象形文字→漢字

飯島紀、国際語学社、『楔形文字の初歩』

巴蜀文字

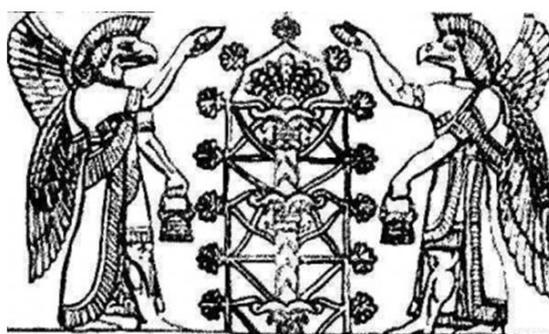


<http://abc0120.net/words/abc2007040504.html>

鷲人間



生命の樹に水を捧げる鷲人間



ゼカリア・シッチン著、竹内慧訳、徳間書店、『人類を創成した宇宙人』

また、夏王朝の始祖とされる禹（ウ）は、Wikipediaに依れば、黄河の治水事業で功績を成し、“禹”という文字は蜥蜴や鱉・竜の姿を描いた象形文字とされ、故に、禹の起源は黄河に棲む水神だったとも言われている。ならば、これは水に関わる爬虫類をシンボルとした水神エンキになぞらえた王であり、夏に先行する古蜀がエンキを最高神とする王国だったからこそ、と推察される。エンキは大洪水後の治水工事を指揮したし、三星堆（さんせいたい）遺跡で発見される古蜀文化を引き継いだとされる文明では青銅器が多々発見されるが、エンキは“銅の彼”とも言われ、銅と関わりが深い。（ただし、青銅の発見はエンリルの長子ニヌルタに依る。）そして、本来のエデン＝エ・ディンはエンキが統括する土地だった。



羽人



<https://search.yahoo.co.jp/image/search?rkf=2&ei=UTF-8&gdr=1&p=%E4%B8%89%E6%98%9F%E5%A0%86+%E7%B E%BD%E4%BA%BA>

以上のことから、地球の主エンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族が支那に広がり、その一部が縄文日本に渡来して王家となったとすれば、縄文の最高神がエンキ＝瀬織津姫だったこと（＜星の信仰＞）と矛盾しない。

そして、「禹＝ウ」という読みは「鳥（からす）＝う」に通じ、羽人をも考慮すれば、おそらく鳥天狗＝八咫鳥の元もまた、この古蜀の流れを汲む一族であろう。鳥天狗は、後に縄文海人のバックアップを受けた秦氏のシンボリック的存在となった。

そうすると、ウバイドの中心都市がウルクで、エンキの都市＝エンキが最高神だったことからすれば、落合氏に情報を提供している筋は、この古蜀系の存在をカモフラージュするために、エンキを最高神としたウバイドを持ち出しているのでは？と思われる。つまり、大陸系に関わる者たちが、未だに日本を動かしている事実を隠したいということだが、これについては後述する。

なお、瀬織津姫はエンキとイナンナの重なりであることからすると（＜星の信仰＞）、古蜀の流れを汲む一族が渡来する以前の、前期縄文人の最高神は、おそらくイナンナだったのだろう。それは、今でも縄文の様相を濃厚に反映している、安曇氏の諏訪大社などで伺える。安曇は“あど、あどん”とも読み、“アドン、アドナイ”はイナンナが愛するドゥムジの愛称だった。また、有名な御柱のハシラはイナンナの別名アシェラ由来であり、上社・下社併せて16本の柱はイナンナのシンボルであるロゼッタの暗示である。御柱祭で御柱を乗りこなすことは、性的に奔放だったイナンナを乗りこなすことにも通じる。

そして、最も原始的な祭祀を受け継いでいる上社・前宮で祀られるミシャグチ神は“御シャクティ”で、イナンナが創造神のインダスでは、生命の根源エネルギーと見なされており、ミシャグチ神が関わる御頭祭は生命の息吹である春に行われるので、豊穰の女神イナンナに相応しい。つまり、諏訪の安曇一族は、イナンナを最高神とする環太平洋文明圏の前期縄文王家である。

御柱

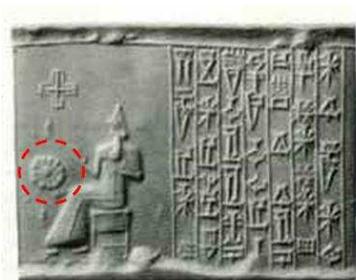


ミシャグチ神



ロゼッタの例

シュメールの粘土板



バビロンのイシュタル門



ツタンカーメン王の墓からの出土品



<http://wave.ap.teacup.com/renaissancejapan/242.html> より

このように、地球の主エンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族の一部が縄文日本に渡来して王家となったと考えられるが、その場所とは？

(4) 縄文王家が存在した場所

邪馬台国でようやく中央集権的な統一国家ができたことからすると、縄文時代は弥生時代とは異なり、緩い共和制のような体制だったと言える。従って、縄文王家は1つだけ、ということではない。

①常陸国風土記の考察

田中英道氏が書かれている記事「高天原は日高見国であった」（日本國史學會、『日本國史學』第八号(2016)）には、興味深い記載がある。

- ・常陸国風土記には“此の地は日高見国なり”とある。此の地とは、我姫（あづま）国のことで、孝徳天皇の御世に8国に分割され、その中の1つが常陸国である。（我姫＝我妻＝東。）
- ・大祓祝詞には、大倭日高見国とあり、延喜式祝詞には「四方の国中と、大倭日高見の國を安國と定め奉りて」とあることから、古代には大倭国と日高見国があったことが伺える。
- ・日本書紀の景行天皇の条には「東夷の中、日高見国あり」とある。
- ・現在の水戸市、河相田町に高天原という地名があり、昔は起伏のある土地で、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が多い。
- ・天照大神のみを天孫降臨の主神として古事記が描いているのは1ヶ所のみで、他の7ヶ所はタカミムスビを並列している。タカミムスビは天照大神よりも古い造化三神で、高御産巢日神と書くが、“高・見・産巢・日”でもあり、“日・高・見”の3文字が含まれている。そして、“産巢”は土地が豊かで生産的であることを表す。
- ・鹿島のタケミカヅチ、香取のフツヌシは出雲に国譲りを迫った。
- ・ニニギは鹿島から立って鹿児島に船団で向かい、天下ったと思われる。海を下ることがアマ下りであり、天下りとなった。そして、これが天孫系の九州への降臨モデルとなり、“鹿島立ち”の語源でもある。
- ・香取は“鹿取り”でもあるが、“舵取り”でもある。
- ・日高見国は鹿島・香取を中心とした祭祀国家である。

要は、鹿島・香取付近は縄文以来の古代祭祀場であり、高天原のモデルともなった重要な日高見国であり、弥生時代のアマテラス信仰に先立つ縄文海人系の王国であるということ。

また、イザナギ・イザナミが祀られる有名神社としては、近江の多賀大社があるが、常陸国にも多賀郡があった。（現在の日立市、高萩市、北茨城市、十王町。）

更に風土記で興味深いことは、香島（＝鹿島）群のト部（ウラベ）氏が自ら住む周辺のことを語っているが、そこに“多く橘を蒔う。其の實味し”と記載されていることである。橘は日本原産だが、前述のように、垂仁天皇の命を受けてタジマモリが、常世国に求めに行った非時香菓である。

第10代・崇神天皇はトヨの時代（＝大邪馬台国）の大王であり、第11代・

垂仁天皇は海部氏系の日葉酢媛（ヒバスヒメ）を娶り、神宮の初代齋宮となる倭姫を娘とする。つまり、大邪馬台国（オオヤマトの国）＝大倭国の大王の命を受けてタジマモリが行った常世国とは、それ以前からの王国で、橘が生い茂る日高見国に他ならない。

このようなことから、かつて、伊勢以外に“神宮”を名乗れたのは、海部氏と同じく物部系の石上（いそのかみ）だけだったが、海部氏の邪馬台国から秦氏の大和朝廷への国譲りとなって秦氏の勢力が強くなって以後、石上は“神宮”を名乗れなくなり、代わりに鹿島と香取が“神宮”を名乗るようになったのである。これからすると、秦氏を裏で補佐していたのは縄文海人王家と言える。

日高見は、文字通り太陽信仰であるが、縄文以来となれば、太陽にエネルギーを与えているとされるシリウス信仰でもある。（＜星の信仰＞）

また、日高という言葉から、飛騨と縄文海人との関わりも推察される。飛騨一宮の水無（みなし）神社の御神体は位山（くらいやま）だが、天皇が即位する際に手にされる笏は、この位山のイチイの木と指定されている。水無神社の祭神は水無大神（ミナシノオオカミ）とされる大年神だが、この神はスサノオと縄文の神で日本総鎮守神である大山祇神の娘、神大市比売（カムオオイチヒメ）との間に生まれたとされ、縄文との繋がりも明白である。

配神は大己貴命、三穗津姫命、応神天皇、高降姫命、神武天皇、須沼比命、天火明命、少彦名命、高照光姫命、天熊人命、天照皇大神、豊受姫大神、大歳神、大八椅命であり、物部系の神が目立つが、中でも海部氏の祖とされる天火明命や海部氏が祀る豊受姫大神からすると、海部氏の影響が濃厚である。

水無神社の御神紋は6個のひょうたんが向かい合わせにされた御紋だが、ひょうたんも海部氏の籠神社に関係が深い。豊受大神を祀る眞名井神社の別名を匏宮（よさのみや）とも言うが、匏（ひさご）とはひょうたんのことである。これは、豊受大神を祀り、天のヨサズラ（ひょうたんの褒め言葉）に眞名井の水を入れてお供えしたことに因む。また、匏宮＝与謝宮の与謝はシリウスの和名の1つ“与謝星”にも因み、ここでも縄文との繋がりが見える。そして、6個のひょうたんは、かつて眞名井神社の石碑に刻まれていた六芒星の暗示でもある。



また、前述の朝鮮半島に渡った瓠公は、瓠を腰に下げて海を渡ったともされ、これもひょうたんである。

更に、先の大戦中、海部氏の兄弟分家である尾張氏が祀る熱田神宮の草薙神劍は、密かに水無神社に疎開された。神器は基本的に同族しか扱えないから、水無神社は海部氏＝尾張氏との関わりも深い。

このように、飛騨はとても重要な地であり、大邪馬台国＝大倭国と日高見国の深い関係が伺える。

②海部氏の渡来経路から考察

海部氏の一団はメソポタミアから大船団で沖縄・九州の始良（あいら）付近を経て、瀬戸内及び四国太平洋側から河内、そして丹後へ。また、鹿児島から別れて九州を北上し、日本海側から丹後へ達した。

海部氏の初代大王・天村雲命は始良付近でアイラヒメを娶ったとされ、最初の妃である。ならば、古代の慣習からして、和平のために王族は相手方の王族を娶るから、アイラヒメも王族の血統と言え、この地域は縄文海人王国の1つと言える。後の宇佐神宮では、卑弥呼がモデルの神功皇后が祀られていることから、両者の結びつきは強い。この結びつきの強さは、第82代・籠神社宮司が宇佐の社家からの入り婿であることから伺える。そして、宇佐神宮が皇室第2の祖廟とされているのも、古くからの土着神で縄文系の比売大神（ヒメノオオカミ＝宗像三神）、弥生系の神功皇后＝卑弥呼、秦氏系の応神天皇が祀られているからである。更に、この地域は“鹿児島”でもあり、“鹿島の児（こ）”と見なせば、先ほどの“鹿島から鹿児島に向かった船団”というのも辻褃が合う。あるいは、かつては“鹿島”ではなく“香島”と書いたことからすれば、“香島＝かぐしま＝かごしま”で、鹿島と鹿児島が同族であることを暗示している。

さて、海部氏は丹後から南下して、最終的には纏向付近を中心とした統一国家、邪馬台国を建国した。その際、最後まで抵抗していた最大勢力が狗奴国である。魏志倭人伝では、（卑弥呼の）邪馬台国の南に位置する、とある。卑弥呼の邪馬台国は都祁野付近、トヨの大邪馬台国は纏向付近で、纏向付近は大邪馬台国ができる以前は湿地帯だったことからすると（＜日本の真相6＞）、狗奴国は奈良盆地以南の紀伊半島、つまり、紀ノ国である。

紀ノ国にも日高見に関わる日高郡があること、また、落合史観に依れば縄文海人は熊野系和田橘氏が中心的存在であることから、紀ノ国もまた、鹿島系と同族の縄文王家と推察される。鹿島・香取は伊勢に次ぐ神宮とされたが、紀ノ国の吉野は後に南朝系が置かれた土地でもあり、落合氏に依れば、南朝系こそ國體天皇である。

また、前述の田中英道氏による『日本の起源は日高見国にあった（勉誠選書、2018）』に依れば、常陸国風土記には次のようにあり、筑波の地はかつて「紀の国」と呼ばれていた。ならば、吉野の紀ノ国と鹿島は同族と言える。

・筑波の県（あがた）は、古、紀の国と謂ひき。美麻貴の天皇の世に、采女臣（うねべのおみ）の友属筑バ（トモガラツクバ）の命を、紀の国の国造に遣わしし時、筑バの命の曰ひしく、「身が名をば国に著けて、後の世に流伝へまく欲ふ」と曰いて、すなわち本の号を改めて、更に筑波と称ふといへり。

紀ノ国には、日前（ひのくま）神宮・國懸（くにかかす）神宮という重要な神宮がある。和歌山市にある一宮でもあり、1つの境内に日前神宮と國懸神宮の2つの神社があり、総称して日前宮（にちぜんぐう）、名草宮と呼ばれる。

日前神宮の主祭神は日前大神（ヒノクマノオオカミ）で、日像鏡（ひがたのかがみ）を御神体とする。また、國懸神宮の主祭神は國懸大神（クニカカスノオオカミ）で、日矛鏡（ひぼこのかがみ）を御神体とする。いずれの鏡も八咫鏡と同等のものとされ、日本書紀に依れば、日像鏡は天照大神が岩戸隠れした際に石凝姥命（イシコリドメノミコト、日前神宮の相殿の神）が八咫鏡に先立って鑄造した鏡とされ、社伝でも、八咫鏡に先立って鑄造された鏡とされている。（ここまで Wikipedia。）

また、明文抄に依ると、日前大神は天懸（アマカカス）大神であり、天照大神の御霊である由が見られ、古語拾遺に依ると、日前大神は日像鏡を祀られ、その次に造られた鏡が神宮に祀られているという。そして、日前（天懸）・國懸大神が日前大神、あるいは天懸大神と言われ、男神・天照国照尊は天照大神と言われる。（海部毅定、桜楓社、『元初の最高神と大和朝廷の元始』（2006）。）

伊勢の神宮の八咫鏡のオリジナルが息津鏡・辺津鏡であり、日矛鏡が海部氏系の天之日矛（天日槍）に由来することは明白だから、御神体の日像鏡・日矛鏡とは、元々は息津鏡・辺津鏡であったのだろう。

よって、紀ノ国の日前神宮・國懸神宮は弥生（邪馬台国）大王家の海部氏の祭祀が基となっている伊勢の神宮に先駆ける最も重要な神宮であり、つまり、後期縄文王国の中心王家のあった所と言え、鹿島・香取、宇佐（鹿児島、始良）で縄文3王家となる。これが、宇佐の宗像三神で暗示されているのである。

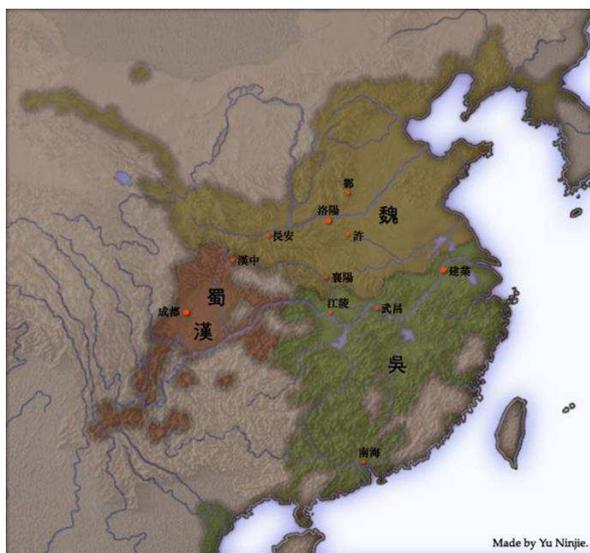
紀州の“紀の国”は木が豊富だから“木の国”由来、ともされるが、“キ”はシュメール語で“地球”の意味で、エンキは“エン・キ＝主・地球の＝地球の主”の意味だから、紀州、筑波を“キの国”と言うことは、共にエンキを最高神として祀る同族であることを暗示している。

宗像三神の中にイチキシマヒメがおり、イチキシマヒメの実態は、弁天様、宇賀神とも習合されたシリウスを崇める縄文の女神・瀬織津姫であることは、〈星の信仰〉でも述べたとおりである。すなわち、2枚の日に関わる鏡は「合わせ鏡」でもあるが、太陽（表の太陽）とシリウス（裏の太陽）を暗示しており、これも弥生と縄文の関係である。

(5) 魏と呉

地球の主エンキを最高神とする古蜀の流れを汲む一族が支那に広がり、その一部が縄文日本に渡来して後期縄文王家となった。その拠点は紀伊半島を中心とし、鹿島・香取と始良～宇佐であり、紀伊の和田橋一族は、卑弥呼の邪馬台国に最後まで抵抗していた狗奴国である。狗は犬を意味し、星としては大犬座のシリウスだから縄文のシリウス信仰であり、“天の狗”で天狗となり、烏天狗の大元である。

ここで、邪馬台国時代の大陸に目を向けると、魏・呉・蜀の三国時代である。邪馬台国は魏に朝貢して親魏倭王の称号を得ており、呉は魏と倭に挟まれた形となる。ならば、呉が倭の中で邪馬台国と対立している一族と手を結ぶことは、容易に想像ができるし、その可能性も高い。後に天智系が百済、天武系が新羅支持で対立していたのと同じ構造である。



ならば、呉を支援、あるいは同盟を結んでいたのは縄文海人で、新羅建国の裏に海部氏の存在があるように、呉建国の裏には縄文海人の存在があったことも否定できない。それどころか、後の日本で着物のことを“呉服”と言い、漢

音導入以前に日本に定着していた漢字の音読みは“呉音”であり、読み方は異なるが広島“呉（くれ）”には海軍兵学校や海軍工廠があつて、戦艦大和はここで造船され、戦後は海上自衛隊の拠点となったことからすれば、縄文海人と呉の関係は、相当深いと言える。

落合氏が言うように、縄文海人が國體護持・財務衆であるならば、大陸系＝古蜀と呉に関わる者たちが、未だに裏から日本を動かしているのである。

ここで、縄文海人の特徴として、自らは隠れ、“戦わずして勝つ”という戦法がある。これは、いわゆる“孫子の兵法”であり、孫武の作とされる兵法書『孫子』に基づく。「百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」である。これは、タケミナカタが敗れて諏訪に逃れたものの、当地のみならず、何故か各地で軍神として崇められるという、表は負けても実で勝つ、という戦法である。つまり、やはり裏から采配しているということである。そして、和田橘一族の“橘家の兵法”なども、この類である。

さて、孫武は呉国へと逃れ、呉の宰相・伍子胥の知遇を得て、『孫子』十三篇を著作した。計篇、作戦篇、謀攻篇、形篇、勢篇、虚实篇、軍争篇、九变篇、行軍篇、地形篇、九地篇、火攻篇、用間篇だが、中でも用間篇の“間”は間諜＝諜報のことで、敵情偵察の重要性を説いている。諜報とは、縄文海人が元となっている忍術の真髄の1つでもある。

そうすると、孫武は呉に存在した兵法の考え方をまとめたと言え、縄文海人と呉の関係と、縄文海人が古蜀由来の一族ということからすれば、“孫子の兵法”とは縄文海人から呉へと伝わったもの、とも考えられる。これが後に、陽明学となって、日本に里帰りした。

(6)陽明学

呉に関わることに、陽明学がある。三国時代の呉に華南の4つの王朝（宋、齊、梁、陳）と東晋を併せて六朝時代と呼ばれ、独自の貴族文化が栄えて陶淵明や王羲之などが活躍し、江南を中心とした華南は後の支那全体の経済基盤となった。この中の東晋の創始は司馬睿（シバエイ）で、王導が後見となったが、王導は晋代の政治家で、西晋と東晋に仕えた。その王導の子孫とも言われるのが、支那・明代の思想家、王陽明である。

王陽明は武将としても優れ、その功績は三征と呼ばれるが、その兵法は“孫子の兵法”を受け継いでいる。思想家として朱子学を批判的に継承し、陽明学を創始した。(Wikipedia)

まず批判された側の朱子学だが、儒教の新しい学問体系で、“理”と“気”を

重視する。気は、この世の中の万物を構成する要素で、常に運動しており、気の運動量の大きい時を陽、小さい時を陰と言う。陰陽の2つの気が凝集して木火土金水の五行となり、五行の様々な組み合わせによって万物が生み出される。理はあらゆる物に内在し、その根源を成し、宇宙の本体を理とし、そこから生じる陰陽の気の運行が物を生じさせるという考え方を理気二元論と言う。ここから「性即理」という実践論が導かれている。「性」とは心が静かな状態であり、「性」が動くと「情」になり、更に激しく動いてバランスを崩すと「欲」となる。つまり、エゴである。欲まで達すると、心は悪となるため、絶えず情を統御し、性に戻す努力が必要とされる、というのが、朱子学の説く理論である。

朱子学は、この性にのみ理を認め(=「性即理」)、この性に返ることが修己とされる。

対して、陽明学は儒教体系の一部だが、知っていても行わなければ知らないことと同じであるという、知行合一(ちこうごういつ)の実践を重んじた。天地に通じる理(=天理)は自己の中にある判断力(良知)にあり、知と行を切り離して考えるべきでないという主張である。陽明学では、物事の理は自分の心において他に無く、それ以外に理を求めても理は無い、という「心即理」を明らかにした。

陽明学は江戸時代に伝えられ、陽明学を学んだ中江藤樹や熊沢蕃山らは、道教思想も取り入れて神道説を説き、特に熊沢は國體護持に関わりの深い岡山藩の池田光政に登用され、功績を挙げた。また、幕末の鍵を握る國體護持の吉田松陰らにも大きな影響を与えた。(ここまで、神社本庁監修、日本文化興隆財団企画、扶桑社、『神社のいろは 続』(2013)。)

(7) 国譲り後の海人たち

① 前期縄文王家海人(安曇氏)

前期縄文王家の安曇氏も海人であることは、中南米から船により環太平洋文明圏にカ・インの系統が広がったことから明白である。当時の気候状況もあわさり、太平洋に面している東北側(鹿島や三内丸山遺跡のある青森)が列島の中心地となった。そして、イナンナを最高神とする前期縄文王家の安曇氏の中核は、後に東北側の寒冷化に伴い、列島の中心で黒曜石が取れ、自然の恵み豊かな土地だった諏訪に隠れた。これが、国譲りに於いて、タケミナカタが諏訪に追いやられたこととして暗示されている。(イナンナは“縄文のヴィーナス”などの土偶として残されている。)では、諏訪大社の主祭神は、上社の前宮は安曇氏のミシャグチ、本宮は出雲系のタケミナカタ、諏訪湖を挟んだ下社はヤサ

カトメ（タケミナカタの妻）と棲み分けがされているのはどういう意味なのか？

古事記の国譲りに於いて、タケミナカタは鹿島の祭神タケミカツチに敗れ、諏訪に隠れた。タケミカツチは鹿島の祭神なので後期縄文海人の祭神だが、これを天孫族＝秦氏に協力した一族と見れば、タケミナカタは海部氏・尾張氏・葛城氏系となるが、神話からしても、葛城氏の中の出雲族と見るのが妥当である。（2018年現在、それを暗示するかの如く、諏訪大社の宮司は出雲系の北島氏である。）古い御頭祭の様子や、本宮がモリヤ山（守屋山）を御神体とすることからしてもユダヤ系の影響が色濃く、縄文系のみのものではない。（＜信州の奇祭＞）

また、諏訪大社の伝承に依れば、タケミナカタは諏訪地方へと来訪した神であり、土着の洩矢（モレヤ、モリヤ）神を降して諏訪の祭神になったとされている。洩矢神は縄文以来続く守矢氏の奉ずるミシャグチ神と同義だから、縄文海人が秦氏の裏から采配したように、ミシャグチは前宮に隠れ、本宮はタケミナカタとなったのである。タケミナカタは日本書紀や出雲国風土記に記載が無いから、単なる出雲族ではなく、そこには隠れた縄文海人の姿を見る必要がある。それは、タケ“ミナカタ”が“ムナカタ”に通じることからも言えるし、本殿が無く、背後の山（守屋山）を御神体とする縄文的祭祀からも言える。（なお、後期縄文海人とされる安曇系真田氏は、安曇系とは言っても、安曇氏と婚姻関係を結んだ古蜀の流れを汲む一族なのだろう。）

下社については、冬場に凍った諏訪湖をタケミナカタが渡って妻の所＝下社に通うという御神渡り（おみわたり）現象からすると、湖の上を渡ったというイエスの伝承に基づいた秦氏系の逸話であり、従って、下社は御神渡りのできる場所に後から秦氏に依って創られた宮と言える。

つまり、上社前宮は守矢氏、本宮は後期縄文海人とそれに協力した出雲系、下社は秦氏系と言える。

②後期縄文王家海人（和田橘、鹿島・香取、宇佐）

これまで見た来たように、秦氏の王家を裏から支えた。言わば、裏の秦氏である。

本来（狭義）の秦氏は原始キリスト教徒で、ユダ二支族が中核である。当時、エルサレム一帯は古代ローマ帝国領だったが、支那ではローマ帝国のことを大秦と書いた。その大秦から字を採って“秦氏”である。また、彼らに合流した十支族も併せた遊牧民は放浪の民でもあり、“秦人”は“流浪の民”の意味があ

るから、“秦氏”である。そして、読みの“はた”は、アラム語（当時のヘブライ語）でユダヤを表す“イエフダー”が転じて“ふた、はた”である。

また、海部氏が国譲りさせられるきっかけとなったのは、徐福系物部氏（出雲族）による御神宝譲渡だが、徐福系物部氏は秦帝国縁だから、狭義の秦氏とは別の意味での秦氏と言える。その後、徐福系物部氏は改宗して狭義の秦氏に容易に従って取り込まれ、広い意味での秦氏となった。言わば、“物部系秦氏”である。

その秦帝国は支那初の帝国だが、更に遡れば、支那文明の大元は四川の古蜀文明である。だから、秦の大元は古蜀の系統の縄文海人とも言え、縄文海人もまた秦氏と言える。言わば、“大元の秦氏”である。

縄文海人は裏に隠れ、狭義の秦氏を支援し、“海の民”から“山の民”となった。山は聖地とされ、彼らの許可無くしては、入山できなかった。山に於ける修験は、彼らに因るものである。

③弥生王家海人（海部氏）

海部氏は鉄をメインとして半島や大陸との交易を取り仕切り、朝鮮半島から羅津にかけての航海経路、そして、国内では不老不死の丹生に関わる水銀鉱脈を取り仕切っていた。

対して、縄文海人は黄金に関わる。大陸側の黄金の重要拠点である羅津は海部氏の航海経路に含まれていることから、海部氏の存在は極度に矮小化され、朝廷に海産物を献上するような話に変えられた。大和朝廷に於いて、その程度の存在で“海部直（アマベノアタイ）”を名乗ることがずっと許されていたのは、航海に関わる重要な事を、海部氏が握っていたからに他ならない。

そして、その黄金を精製するために、海部氏の水銀が使われた。細かく粉碎した金鉱石を水銀に混ぜるとアマルガム（金と水銀の合金）ができ、これを加熱して水銀を蒸発させ、金を取り出していた。大仏などの仏像も、かつてはこのように金メッキしていたのである。（だから、平城京の気は水銀蒸気で汚染され、早急に都を遷都させなければならなくなった。東大寺の大仏開眼供養会は752年、長岡京遷都は784年。）黄金の精製という観点からも、海部氏の存在は大変重要であり、四国から紀州の高野山、伊勢にかけては水銀の一大鉱脈である。

黄金を大量に得るためには、砂金では回収量がとても少なく、商業的な採算ベースには乗らない。このことから、落合氏の言われる砂金黄金ファンドなどは、到底無理な話である。だからこそ、後期縄文海人は国内最大の金鉱山である菱刈鉱山に目を付け、鹿児島～始良に王家を置いたのである。

このように、海部氏は鉄、水銀、そして金のすべてに関わる。それ故に、異形の者や鬼として真相を封印され、海部氏の奉じる豊受大神の本質はウシトラノコングンとして、鬼がいるとされる方角（艮）の鬼門に封じられた。豊受大神の原型は海部氏の奉じる最高神イナンナだが、イナンナは牛をシンボルとするエンリル系の血統（エンリルの孫）であり、獅子やジャガー、虎を従える姿として描かれる。

この牛に関わる重要な祭りが、京都の広隆寺で行われる。この太秦から広隆寺一帯は、かつて海部氏の治める土地だった。その広隆寺では、不定期に「牛祭り」が行われる。元々は、広隆寺の境内社であった大酒神社の祭りである。大酒神社は本来、大避神社と書き、大避は漢字でダビデを意味するから、ダビデ神社とも言われる。

平安時代、比叡山の恵信僧都が極楽浄土の阿弥陀如来を拝する願いを持っていたところ、広隆寺講堂の御本尊を拝めば良い、と夢のお告げがあり、常行念佛堂を建立し、念仏守護の神、摩訶羅神（マタラシン）を勧請して祈祷したのが始まりとされている。明治以前は旧暦9月12日の夜半に斎行されたが、現在は牛の調達が困難のため、不定期開催となっている。



<http://www.kuniomi.gr.jp/togen/iwai/usimatur.html>

白衣装束に仮面を着け、紙を垂らした冠をかぶり、その頭巾には北斗七星を載いた摩吒羅神が牛に乗り、四天王と呼ばれる赤鬼・青鬼各 2 人が松明を持って先導し、広隆寺西門から出て行列する。

東門より境内に入り、薬師堂の前の祭壇を牛に乗ったまま 3 周した後、祭壇に上り、厄災・退散を祈願する祭文を独特の調子で読んで、参拝者がこれに罵詈雑言を浴びせる。祭文を読み終わると、摩吒羅神と四天王は薬師堂内に駆け込んで終了となる。(以上、主に Wikipedia。)

この祭りでの主役は摩吒羅神である。念仏守護の神とされているが、四天王に先導されている。四天王とは、帝釈天に仕え、須弥山の中腹にあるとされる四天王天の四方に住み、仏教を守護する四柱の神である。(東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天、北方の多聞天。) 帝釈天は天主帝釈・天帝・天皇とも言われ、バラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の武神インドラである。そのモデルはアッカドのイシュクルで、雷神・天候神・軍神故に、ギリシャではゼウスとなる。(イシュクルはエンリルの末息子。イナンナやウツの叔父であり、彼らととても仲が良かった。イナンナはバラモン教・ヒンドゥー教・ゾロアスター教の創造神である。) インドラとは、“強力な神々の中の帝王”を意味するので、天帝・天皇であり、最高神ゼウスである。

摩吒羅神は牛に乗っているが、エンリル系は牛がシンボルである。そして、摩吒羅神の頭巾には北斗七星が描かれている。北斗七星は、天帝を守護する御者だが、天帝の星は北極星で、天に於ける不動の星である。これでしばしば言われるのが、太陽に対する北辰信仰だが、北斗を冠する北斗神社(諏訪市)では、天御中主神を祀る。

つまり、北斗七星が象徴するのは、天に於ける不動ということから、原初の最高神・天御中主神である。これが、天帝・天皇、最高神ゼウスとなる由縁である。そして、広隆寺の近くにある木嶋坐天照御魂神社では天御中主神を祀り、籠神社の極秘伝では、天御中主神＝豊受大神＝天照大神である。太陽神でもあるが故に、摩吒羅神は日が昇る東門より境内に入る。

ここで重要なのは、四天王が鬼とされ、牛をも意味する摩吒羅神が追いやられることである。鬼とされた牛をも意味する神が追いやられ、封印される。天御中主神＝豊受大神ならば、すなわち、ウシトラノコンジシメ＝良金神である！

アマテラスは太陽、ツキヨミは月をシンボルとし、スサノオは星をシンボルとするともされるから、天に於ける不動の星はスサノオの暗示である。スサノオは牛頭天王であり、元はシヴァ神で、その原型はイナンナであり、イナンナ＝豊受大神であるから、やはり追いやられる牛に乗る神は牛頭天王＝スサノオ

＝豊受大神＝ウシトラノコンジンとなり、矛盾しない。

従って、広隆寺の牛祭りとは、ウシトラノコンジン封印の再現で、豊受大神を祀る海部氏の真相封印の暗示でもある。これはまた、救世主＝ミロクの暗示でもある。ミロクの元はマイトレーヤーで、ミトラス神である。摩訶羅とは、すなわち、ミトラのこと。ミトラスは太陽神で、復活の神故に、太陽神ウツ（イナンナの双子）とイナンナの習合である。これを裏付けるかの如く、広隆寺には国宝第 1 号となった新羅様式の弥勒菩薩（半跏思惟像）があり、新羅は海部氏が建国した国である。

更に、摩訶羅神＝帝釈天＝天帝・天皇ならば、本来の天皇の封印の暗示でもある。換言すれば、秦氏の大王以前の、邪馬台国大王家封印である。広隆寺には聖徳太子像があるが、即位礼で陛下がお召しになったのと同様の御装束が新しく調進され、下賜されてこの像に着装されてきた。これは、海部氏系の大王が封印されたことを暗示している。聖徳太子は厩戸皇子（ウマヤドノミコ）と言われ、イエスが投影された救世主的＝ミトラス的性格を有する。そして、海部氏系の継体天皇の曾孫であり、母の穴穂部間人皇女（アナホベノハシヒトノヒメミコ）の“間人”は海部氏の籠神社のある丹後の地名に因む。（聖徳太子の詳細については別途、考察予定。）

ウシトラノコンジン＝牛頭天王＝スサノオは天王＝天皇でもあるが、イザナギの禊後に三貴子の誕生した順番は、アマテラス→ツキヨミ→スサノオだから、スサノオが長男、ツキヨミが次男、アマテラスがその後の長女となる。（後から出てきた方が長男となるのが本来の見方で、昔はこのように決められていた。また、生態学的にも、先に受胎した方が後からの誕生となる。）そして、古事記では、スサノオはイザナギの鼻から生まれたから、（アマテラスは左目、ツキヨミは右目）スサノオが中心である。つまり、スサノオが中心で、本来の長兄ということである。

記紀は秦氏が創作し、その大王家の祖が天照大神だから、記紀の暗示するところは、スサノオが秦氏以前の大王家であるということ。そのスサノオは、海部氏のウシトラノコンジン＝豊受大神＝イナンナであり、後期縄文海人の最高神エンキでもあり、イナンナとエンキが重なってシリウスである。そして、前述のように、スサノオの暗示は天に於ける不動の星でもあるから、結局、太陽とシリウスを通じた天御中主神＝宇宙創造のエネルギー＝起源意識である。